

菜根譚と新菜根譚（新しき世界へ 1972年9月号）

プロローグ

魚返氏(注1)の新訳「菜根譚」はオモシロイ。(野村三郎君提供)第一、信用してよめる。第二、訳文がうまい。この本は少年時代にスバラシイと思った本だが、60でよみ返して見ると、一言にして云えば実にツマラナイ本だ。著者洪自誠と云う男は俗物だ。よく云えば「くだけた道学者」、悪く云えば「聖人の教えをぬすんで大道で売る山師」「生グサ禅坊主」—第一義的なことは分るものじゃない、と公言する宗教屋。

三六〇句の中からココロミにいい句を拾って見よう。これらの句はミナ結構なモノだが、ドレモコレも何かぬけている。「なぜか」か「ドオしたらソレが出来るか(分るか)」かの問をかけて見るとミナ沈黙してしまう。両方の間に返答のないものもある。

道学者(学者)、バリサイ人、異邦人の珍重する石コロミみたいなモノばかりである。ナルホドと思っても出来ないコト。アトではア、ナルホドと分るが、その場では思いつかないコト。

こんな本が有名なのだからオメデタイものだ。こんな本なら一日に一冊、月三十一冊でもかけるが、それではツマラナイ。一つ私のホントーノ菜根譚をそのあとにかいて見よう。

1.新訳菜根譚

■くどい料理はまやかした。ほんとの味はアッサリ。奇抜な人はまやかした。まことの人は平凡(7)(以下カツコ内は章)

■菜っ葉くう人たちは、心が玉のよう。ぜいたくする者の、下品なさまをみよ。質素は心をきれいにし、ぜいたくは意地をきたなくする。(11)

■きたないウジ虫も、セミになれば秋風に露を吸う。腐った草も、ホテルになれば夏の世の景物だ。なるほどキレイはけがれから、光はヤミから出るものだ。(24)

■カンゾウを病むと目がみえなくなる。ジンゾウを病むと、耳がきこえぬ。病気はみえないところに起こり、誰にもみえるところに出てくる。だから、人間ひと前とがめられぬためには、まずかげで悪事をせぬことだ。(48)

■聖人の気を知らぬ学者は、筆耕屋とおなじ。人民をおもわぬ役人は、ていのいいドロ坊。実地をやらぬ学者は、ただ空念仏。のちの世をおもわぬ事業は、ただ目さきの花。(56)

■心の光は、ヤミにも青い空をみる。心のヤミは、ひる日なかにも鬼をみる。(65)

■名誉や地位のたのしみより、地位も名誉もないのが真のたのしみ。たべ物・着物の心配より、衣食にこまらぬ人はもっと心配。(66)

■バレるのをこわがるうちは、悪人もまだ善にかえられる。これ見よがしにするならば、善ももう悪のはじまり。(67)

■山でおちついてもダメ、町でおちついてこそ、真の心の別天地。安楽なたのしみはまだ

ダメ、くるしみをたのしめてこそ、心のほんとしとい人。(88)

■年増芸者もかたづけば、むかしの浮き名はさわらない。しらがババアの浮気でも、ながの苦勞がフイになる。ことわざに「人のねうちはあと半生」と。しごくもつとも。(92)

■平民も徳となさけで、いわば無任所大臣。官僚もヤミ取り引きときは、けっきょく勅任コジキ。(93)

■ままならぬ時、まわりはすべて針・薬 身のためになるとも知らず。ままになる時、前にはいっぱい刀やホコ、骨身をけずるとも知らず。(99)

■うまい物は、みな腹の毒・骨の毒。腹半分が無事。たのしい事は、すべて身の毒、ヒンの毒、五分かたが安全。(104)

■天地はとこしえに、この身はまたとなし。人生ただ百年、月日のたつはやさ。とにかく生れたからは、いのちのたのしさを知らねばならぬ。またむなしく生きぬ心構えがいる。(107)

■お世辞で喜ばれるよりも、まじめでいやがられるがまし。無能でほめられるより、無実でそしられるがまし。(112)

■隅ずみまで抜かりなく、かげでもごまかさず、落ちめにもヤケをおこさず。それでこそ男いっぴき。(114)

■難儀苦勞は、人をきたえるカナ床のようなもの。たたかれ抜けば、からだもハラもできる。よくたたかれぬと、できそこないになる。(117)

■空にかがやくいさおしも、もと片隅でひそかにできた。天地を動かすくわだても、ビクビクもので考え出された。(132)

■見えぬ悪事と、見えすいた善。見える悪事は害が浅く、見えぬ悪事は害が深い。見えすいた善は取るにたらず、見えぬ善こそ偉大である。(138)

■さかなのアミに、ガンがかかったりする。えさをねらうカマキリを、あとからスズメがねらう。ふしぎなカラクリ、何が出るかわからぬ。知恵なんて当てになるものか(149)

■「ネズミに飯をのこし、がのため火をともしぬ」一昔の人のこの気もちが、人間のせめもの生きがいだ。これがなかったら、人間もデクもおなじこと。(173)

■心は宇宙とおなじ。うれしいときは、よい星・よい雲。くやしいときは、かみなり・大あめ。やさしくなれば、そよ風に露。いかつくなれば、夏の日・秋の霜。どれも必要。ただ出たり消えたり、こだわることなく、大空のようにありたい。(174)

■事業を自慢し、学問をひけらかすのは、外物にたよる人である。心が玉のようで、本来のすがたであれば、学問・事業のカケラがなくても、りっぱに立って行けることを知らぬ。(183)

■人間、潔べきにすぎぬよう。よごれけがれも、丸のみがよい。交際はキチウメンすぎぬよう。ヤクザやノロマも、来させたがよい。(188)

■世間では気に入った事を楽とおもい、かえって楽のために苦をする。さとった人は気に入らぬことを楽とおもい、苦しみを楽しみにかえている。(204)

- 釣りは風流であるが、なおセッショウなどところがある。ゴ・ショウギはきれいごとだが、でも争いの気持ちがある。だか物ずきより物ぐさの方が気楽。多芸より無芸が自然。(227)
- 長い月日もしそがし屋が短くする。広い天地もケチなやつが狭くする。四季の自然はのどかなのに人はテンテコ舞い。(229)
- 世界そのものがもともとミジン、人間はミジンのまたミジン。からだそのものがもともとアブク、そのほかのものはアブクのアブク。なみの知恵では、悟りきれまい。(237)
- ZEN宗で「腹へれば飯をくい、ねむければ寝る」。詩の話に「目で見たことを口でいえ」とあるが、高尚は平凡にあり、むずかしそうでやさしく、ひねるほどヘンになり、無ゾウサがよいという意味。(260)
- 世間ではウグイスをよろこび、カエルがなくといやがる。花を見ると植えたがり、草を見ると抜きたがる。ただ見かけを主にしている。自然という点から見れば、どれもみな自然の作用をあらわし、自然のいのちをのばしているのだ。(275)
- 魚は水に泳ぎ、しかも水を忘れてる。鳥は風に飛び、しかも風に気がつかない。あの要領で世を忘れたら、自由に生きられるだろう。(293)
- きざはしにはキツネ、うてなにはウサギ。これが昔の栄華の跡だ。ススキには露、枯れ草に霧。これが昔のいくさの庭だ。栄華も夢、強いのも滅びた。おもえば味気ないことだ。(294)
- 空には月清く、空高く飛びまわるがよい。だのにガはあかりに飛びこむ。水も青草も、思いのままにたのしめる。だのにフクロウは死んだネズミを食う。ああ、ガやフクロウのまねをしない人が、幾人あろうか。(296)
- 草木は根だけになって、花や枝葉のはかなさがわかる。人間はカンオケにはいる時、子や財産がつまらぬとわかる。(303)
- 生れぬ前のかたちをかんがえてみ、また死んだあとのありさまを、思ってみれば、迷いもさめはて、たましいだけとなり、物に超越し、かたちのない世界を知る。(323)
- 多情女がヒステリーからアマになり、ガムシヤラ男が悲観して坊主になる。神聖な場所にトカク色ザタが多いのはソノためだ。(355)

2.新菜根譚

はしがき

これは洪自誠の有名な、名ばかりの菜根譚ではありません。私のは名ばかりでなくホント一二野菜や根菜やその実ばかりをたべて自由で平和な世界に入る食生活法であります。これは生理学的、生物学的な教育による人間革命であり、世界革命であります。その理論は最高、最深ですが、その実行は最も簡単なモノでイツ、ドコ、ダレを問わずにスグ実行できるモノです。しかも理論と実行が一枚になっています。理論は最高唯一の真理であります。学者、パリサイ人、異邦人にはチンブンカンで無名の無学の貧しい人でも苦勞し

た人ならスグ分るモノです。

この食生活を正しく長く実行した人や、これからする人や、まだ知らない人のために、私の60年間の体験の結晶を洪自誠風にかきつけますー

(一)金や力や、知識や名誉や、地位や有名に近よらぬ人は偽善者、近よる人は勇者、勇者の最期は悲壮。そんなモノよりハルカニ高くて大きい永遠なる、無限の絶対者をマッシングラニ求める人だけが幸福な自由で平和な世界への入場券をもっている人。この心ガケは十才までにきまったモノでないと効力がない。

(二)クルシミをタノシミにする人にとってはこの世は極楽天国だが、ソナ人は判断力が最高の段階に達した人だけである。その最高の判断力をもたずに生れてきた人はないのだが、親が自分の判断力をその子のために用いるので、赤ン坊時代から毎日毎日子供の判断力は萎(な)えてゆく。

(三)「人のネウチはあと半生」と云うのはいいコトバだ。しかしネウチのきまるのはアト半生にしても「アトの半生」はマエの半生がなくてはきまるモノではない。私はムシロ六才までにきまる、と云おう。

(四)悪意をもって苦しめてくれる人ほどアリガタイ人はないのだが、善意をもってくるしめてくれるアリガタイ人をさえうらむ人がある。要するに万事がアリガタク見えない人はトテモ幸福な人にはなれないし、現在今がモー不幸である。判断力の問題だ。

(五)ウマイ物はミナ毒、スキナ事はミナ毒になる。なぜか?なぜナラ人間にとってウマイモノ、スキナモノはミナ▼性だし、人間は▲だから当然である。所詮のがれるスベのないオトシアナである。神の手だ。そこでソノ毒をとりながら、それも人一倍十倍とりながら身を亡ぼさずにゆく方法だけが人間に許されている唯一のニゲロである。感覚や感情がマダ十二分に発達しない間に(六才までに)ウンと▲をとっておくコト、そして死ぬまでヒマさえあれば▲をとるコト!つまりサムサ、ヒモジサだ。ウス着をしてスキバラでいるコト。マズシサはソレラを徹底的に与えてくれる。

(六)「オセジでよろこばれるより、マジメでいやがられる方がよい。無能でほめられるより無実でそしられる方がよい」(112)ソレはホントオだ。しかも私は「悪意の人にいじめられ、善意で人をいじめ、シカモしたわれる方がモットいい」と云う。

(七)善と見え、善と思われ自分も善と思いこんでいる悪ほどシマツにおえないモノはない。政治、教育、医学、調理、栄養、新薬、宗教…

(八)清濁合せてのむ、より「濁ばかりのんても清にするような人になる修業せよ」の方がよい。

(九)欲はナカナカ少くできないし、道はナカナカ修められない。しかし道で欲を充すとヤスヤスと双方とも充たされる。

(十)釣りや鉄砲は殺生(せっしょう)で、気が荒くなり、肉が病むか判断力が弱くなるコトうけあい。麻雀や碁は争いの気、排他性を強め、自由世界、平和世界を遠ざける。何と云っても全世界、全人類を自由で平和な世界へ狩り立てるほどオモシロイ、罪のない道楽はな

いのだが、コレが分る人が実に少い。

(十一)目で見たコトを口に出して見ると、スッカリ自分の目がフシ穴であったコトにおどろいたり、ハジをかいたりする。第一、見たままが云えないし、云っても穴だらけ。ホント一皿一枚出してもソレが陶器か磁器かマグナか、いくらモノか分らない人がザラ。

(十二)禅では「マア座れ」と云う。真生活法では「マアよくかめ！」

(十三)太陽や風や雲や雨や海や地球や宇宙がミナ自分のモノなのに、人間はセマイ土地やケチナ電灯やセマイ風呂や池を自分のモノとして登記したがる。ナント云うアワレナ、アサハカナ心だろう。

(十四)ナニを出されてもアリガタク受取る、そしてノレを生かし、のばすのが PU の極意。悪口、暴力、サギ、盗人……病気！

(「コンパ」75～76号 1953.8.1.より)

注 1……魚返氏、魚返善雄（うおがえり・よしお）氏

本文の複写、複製、転載、その他いかなる方法による使用の際には日本 CI 協会にご相談ください